

境界 6

あらゆる答えの背後にある問い。

人生の大半、私は答えを追いかけてきた。

ほとんど誰もがそうするように。

正しい決断はどれかを知りたかった。

最良の道はどれかを。

自分が生きていることの意味は何かを。

明快さが欲しかった。

方向が。

確証が。

成熟とは答えを蓄えることだと信じていた。

時が経つほど、その仕組みが分かるようになるはずだと。

経験を積むほど、疑いは減るはずだと。

洒落た理論だった。

問題は、人生がそれを完全に無視しているように見えたことだ。

年月は過ぎた。

経験は増えた。

責任は重くなった。

それでも問いは減らなかった。

その逆だ。

より深くなった。

より複雑に。

より難しく。

足元を揺るがす発見だった。

少年のころ、大人とは理解し終えた人々だと思い描いていた。

やがて大人になった。

そして、私たちの多くはただ不確実さと共に生きることを学んだだけだと知った。

それは同じことではない。

知ることと続けることのあいだには、途方もない違いがある。

多くの者は続けている。

本当に知っている者は少ない。

いたるところに答えを探した時期を覚えている。

書物の中に。

組織の中に。

旅の中に。

より経験を積んだ人々の中に。

霊性の中に。

合理性の中に。

数字の中に。

どこかに、すべてを秩序立てられる説明が存在すると信じていた。

公式が。

鍵が。

体系が。

だが見つけたと思うたびに、新しい経験がやって来てそれを問い直した。

はじめは苛立たしかった。

やがて面白くなった。

ついには解放になった。

あることを理解したからだ。

答えの寿命は短い。

正しい問いの寿命は長い。

とても長い。

数十年、私たちに付き添う問いもある。

私は誰か。

本当に大切なものは何か。

愛するとはどういうことか。

何のためなら苦しむに値するか。

すべてが変わるとき、何が残るか。

解くべき問いではない。

住まうべき問いだ。

その違いは本質的だ。

答えは閉じる。

問いは開く。

そして人生は、つまるところ、開かれたほうを好む。

新しい経験を通り抜けるたびに、価値は到達した結論にあるのではないと気づいた。

その経験が生み出した問いにあった。

喪失は問いを生む。

愛は問いを生む。

病は問いを生む。

勝利は問いを生む。

成功でさえ問いを生む。

しばしば、失敗よりもずっと難しい問いを。

何かを手に入れたあとには、思いがけない問いが現れるからだ。

「それで、これから？」

何年ものあいだ、物事の意味は答えの中に隠れていると信じていた。

やがて、奇妙な符合に気づき始めた。

出会う中で最も興味深い人々は、最も確信の少ない人々でもあった。

優柔不断なのではない。

開かれていたのだ。

現実は自分の信念より広いと分かっていた。

自分の図式より複雑だと。

自分の結論より豊かだと。

だから問いを発し続けていた。

弱さからではない。

知性からだ。

本物の知性とは、多くの答えを持つことではない。

どの問いがなお発するに値するかを見分けることだ。

生涯で、さまざまな国を訪れてきた。

さまざまな文化を。

さまざまな宗教を。

さまざまな制度を。

どの土地も異なる答えを持っていた。

それでも根本の問いは、ほとんどいつも同じだった。

いかに生きるか。

いかに愛するか。

いかに死と向き合うか。

いかに時間と共に生きるか。

いかに意味を見いだすか。

これは私の心を深く打った。

普遍的な何かを示していたからだ。

文明は言語を変える。

本質的な問いは変わらない。

おそらく、物語が生き残るのはまさにこのためだ。

解決を差し出さないからだ。

探究を差し出す。

小説は人生を解決するためのものではない。

ひとつの問いを照らすためのものだ。

そして良い問いは、何年も人に付き添うことができる。

数々の答えにまさって。

手放してきたすべての確信について思いをめぐらせた日を覚えている。

数多くあった。

多くは、私の生の長い期間を支配していた。

役に立ったものもある。

そうでもないものもある。

だがすべては、より成熟した何かに席を譲っていた。

現実法廷ではないという自覚に。

対話なのだ。

知っていることと知らないこととのあいだの、果てしない対話。

理解していることと、すり抜けていくこととのあいだの。

かつての私たちと、なりつつある私たちとのあいだの。

その瞬間から、疑いを敵として扱うのをやめた。

旅の道連れと考えるようになった。

すべての疑いが注意に値するわけではない。

雑音であるものもある。

恐れであるものもある。

ただの混乱であるものもある。

だが、別の疑いがある。

より深く。

より静かで。

より誠実な。

繰り返し戻ってくる疑い。

年また年と、意識の扉を叩く疑い。

聞き届けられることを求める疑い。

私はそれらを尊ぶことを学んだ。

しばしば重要な何かを蔵しているからだ。

変容を。

真実を。

方向を。

まだ踏み入っていない私たちの一部を。

振り返って、私はもう、何にでも答えを持つ人々には心を動かされない。

それより、本物の問いを立てられる人々に惹かれる。

答えは尽きることがあるからだ。

問いはひとつの人生をまるごと生み出すことがある。

おそらくこれは、時間が私に残してくれた最も貴重な教訓のひとつだ。

答えだけを探すな。

それを生んだ問いを探せ。

意味ある信念のすべての背後に。

現実の変化のすべての背後に。

重要な選択のすべての背後に。

語られるに値する物語のすべての背後に。

いつも見えない問いが存在する。

そしてそこから旅が始まる。

答えよりも、ずっと前に。